# 元岡・桑原遺跡群

―九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う発掘調査―

2019

福岡市教育委員会

# 元岡・桑原遺跡群について

福岡市西区元岡・桑原の地には、以前から縄文時代の貝塚である元岡瓜尾貝塚、桑原飛櫛貝塚があり、丘陵上には元岡石ヶ原古墳や元岡池ノ浦古墳といった前方後円墳、大型円墳の経塚古墳など大小の古墳が点在する地区として知られていました。

ここに九州大学が新キャンパスを設置することが計画され、この地にある文化財を確認し、保存するための発掘調査が平成７年（1995 年）から始まりました。

発掘調査では、これまで明らかになることがなかった元岡・桑原地区の歴史を紐解く大発見が相次ぎ、太古の昔から人々がこの地でさまざまな活動を行っていたことが判明しました。

「元岡・桑原地区には旧石器時代から人々が生活し、縄文時代のはじめには集落が作られていた」

「弥生時代には、元岡の南の谷で大量の土器を使ったお祭りをしていた」

「古墳時代には鉄器作りが始まり、同じ時期に作られた古墳には金の文字が書かれた刀が供えられた」

「奈良時代には、桑原の谷に製鉄炉をたくさん築き、多くの鉄が作られていた」

これらのことは全て、今回の一連の調査ではじめて分かったことです。このほかにも多くのことが発掘調査で明らかになりました。

この本では、発掘調査で見つかったもののうち、主なものについて紹介しています。今では大学の中で、以前ここで人々が生活していたことを感じられることはほとんどありません。しかし、この本を片手にキャンパスを歩けば、昔の人々の息づかいを感じられるかもしれません。この本が、九州大学の、そして元岡・桑原地区の歴史を解き明かすための参考になれば幸いです。

発掘調査は平成 27 年（2015 年）まで続けられました。見つかった遺跡のいくつかは丁寧に埋め戻され、地下で眠っています。また、キャンパス内の森の中にもまだ、未調査の古墳が残っています。最先端の研究施設と昔の遺跡が共存する大学として、九州大学が今後発展することを願っています。

九大移転前の元岡・桑原遺跡群
（平成８年撮影）

# 元岡・桑原地区の歴史

元岡・桑原遺跡群は平成 7 年（1995 年）の第 1 次調査から平成 27 年（2015 年）の第 66 次調査まで 21 年間にわたって発掘調査を行ってきました。その他に前方後円墳や古墳群の調査を実施し、調査の総件数は 69 件に上ります。

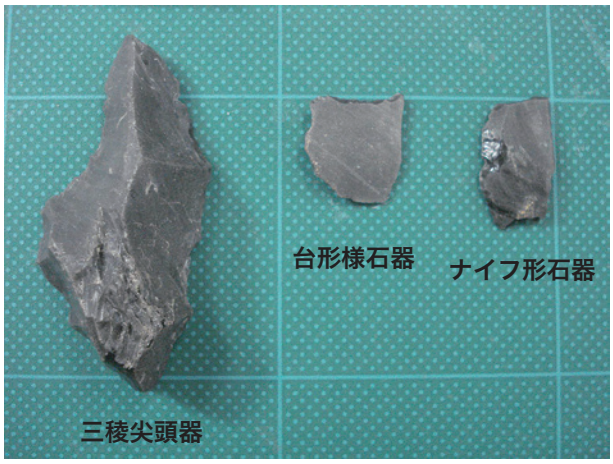
ここでは、これまでの発掘調査で得られた成果をもとに、元岡・桑原地区の歴史を振り返ってみます。今では緑豊かな研究都市になった元岡・桑原の地ですが、これまでどのような歴史が繰り広げられてきたのでしょうか・・・。

## 旧石器時代

元岡・桑原遺跡群では旧石器時代の終わり頃（今から約 3 万年前～ 1 万 6 千年前）に人々が使っていた石器が出土していて、旧石器時代の人々がここで活動していたことが分かっています。

この時代は今よりも海水面が低く、人々は大陸から海を渡って日本列島に来て、小動物や植物を追い求めて移動する生活をしていたと考えられます。

元岡・桑原遺跡群ではこの頃の石器が出土していますが、どれも元の場所から雨などで流されて、後の時代の遺物に混じって出土したものです。3 次調査や 7 次調査、18 次調査や 27 次調査ではナイフ形石器や台形の石器、薄い剥片からできた細石刃やその原材料の石核が見つかっています。いずれの遺物も雨で流されて谷に堆積した地層から見つかっていて、後世の遺物に混じって出土しました。



18 次調査で出土した旧石器→

## 縄文時代

縄文時代の初め頃（今から約 1 万 3 千年前）には丘陵の上や斜面に石を集めた遺構や、炉の跡が作られていることが発掘調査で分かりました。3 次調査ではこの時代の遺構や遺物が出土し、58 次調査ではこの時期に作られた撚糸文土器や押型文土器などの、表面に文様を型押した土器が出土しています。この時期の遺跡は近くの大原 D 遺跡などでも見つかっていて、この付近を中心に集落が点在していたと考えられます。

縄文時代の中頃から後半にかけて、丘陵の端に貝塚が作られました。桑原飛櫛貝塚は縄文時代の中頃から後半にかけて作られた貝塚で、アサリやマガキの貝殻が 80cm の厚さで堆積しています。貝塚の中には墓があり、1 基の墓には貝輪を腕に着けた女性が埋葬されていました。

元岡丘陵東麓にある元岡瓜尾貝塚は縄文時代の後半の貝塚で、溜池の岸に貝の地層が露出しています。

出土した押型文土器（７次調査）

マガキやシジミなどの貝殻や動物骨、魚骨が出土しています。当時、糸島半島の南部は海になっていて、漁業が盛んだったと考えられています。糸島半島には他にも天神森貝塚や岐志貝塚などの貝塚があり、北部九州の中でも貝塚が集中する地区です。

縄文時代の終わり頃には２次調査で貯蔵穴（ちょぞうけつ）とよばれる地下倉庫が見つかり、42 次調査でもこの時期の遺物が堆積した地層が見つかりました。この時期に丘陵の谷部や裾部に水田を作って稲作を始めたと考えられています。

（縄文時代について詳しくは 10 ページ）

縄文時代草創期の発掘調査（52 次調査）

## 弥生時代

弥生時代の中頃（紀元前後）には丘陵の南側の谷で大量の土器を捨てたことが 42 次調査で明らかになりました。調査では、谷一面に土器の破片が広がる状況が確認されました。土器に混じって祭りのときに使われた木器や小型の銅鐸、琴などの楽器も見つかり、祭りを行った後で土器を捨てたことが考えられています。

朝鮮半島で作られた土器や、国内の近畿地方、中国地方で作られた土器も出土していることから、当時の人々が遠くの地域まで活発に活動して交流していたことが考えられます。

当時中国で使われていた貨幣もこの 42 次調査で出土しています。ちょうど奴国（なこく）が中国に使者を送って金印をもらった時期のもので、この元岡地区に住んでいた人も中国の人と交流があったのかもしれません。

元岡・桑原遺跡群の南側には海が入り込んでいました。沿岸には集落が分布していて、その中には磨製石斧（ませいせきふ）の材料である玄武岩産地である今山（いまやま）遺跡、弥生後期以降の拠点集落である今宿（いまじゅく）五郎江（ごろうえ）遺跡や潤地頭給（うるうじとうきゅう）遺跡などの大きな遺跡があり、当時の人々が湾を中心にして活発に活動していたことが分かります。42 次調査で出た大量の土器は湾岸で活動していた人々が生み出したものということができるでしょう。

（42 次調査について詳しくは 11 ページ）

弥生時代中期後半の土器（丹塗磨研土器・42 次調査出土）

ヒョウタン形土器（42 次調査出土）

# 古墳時代

古墳時代には丘陵上に６つの前方後円墳が築かれました。このうち３つの古墳で発掘調査を行い、古墳の形や作られた時期などを明らかにできました。

1996 年から調査された桑原金屎古墳は古墳時代の前半（4 世紀頃）に作られた古墳で、石室を作らずに竪穴の墓壙の中に木棺を設置する、前方後円墳の中でも古い形のものです。木棺の中には２枚の鏡が副葬されていました。

13 次調査で行った元岡古墳群Ｅ－１号墳は前方後円墳で全長 35m の小型の古墳です。金屎古墳と同様に、後円部の上に竪穴を掘り、その中に木棺を置いたと推定されています。古墳は大きく削られていましたが、木棺があったとみられる付近で銅鏡が見つかりました。古墳時代の前半（４世紀）に作られた古墳と考えられています。

35 次調査の元岡石ヶ原古墳は古墳の横に石室の入り口があった、古墳時代の後半（６世紀頃）の前方後円墳です。古墳は山の上にあり、古墳は山を削った後で土を盛り上げて作っています。

山の上だけでなく、海岸沿いに作られた古墳もあります。経塚古墳は大型の円墳で、前方後円墳と同格の古墳と考えられます。海岸沿いに作られ、表面には葺石が敷かれていました。

発掘された経塚古墳（36 次調査）

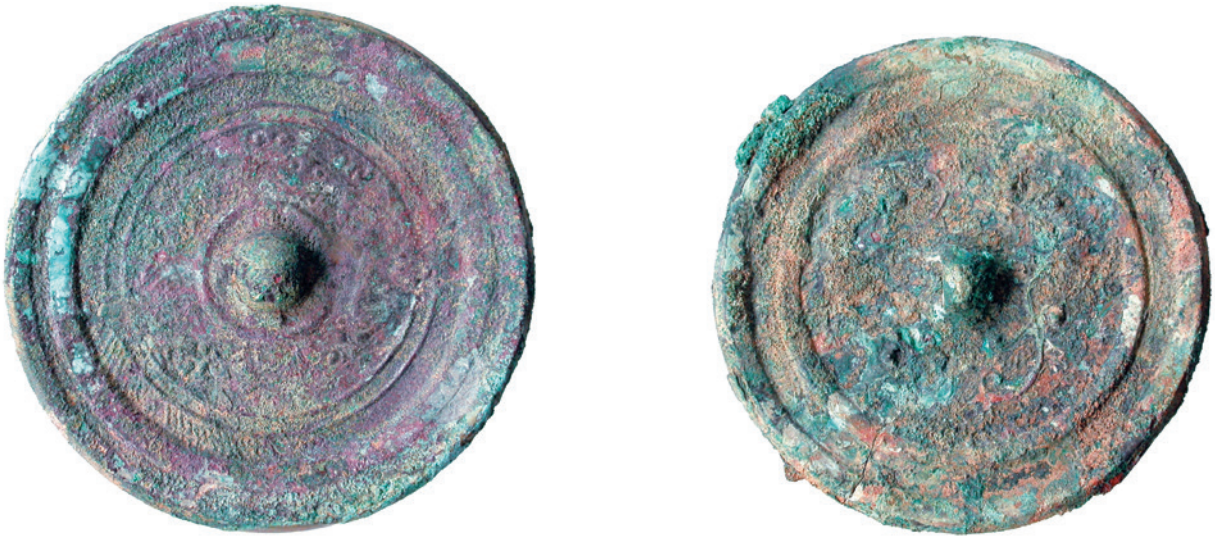
古墳時代の後半には丘陵のあちこちで小型の円墳がかたまって作られます。その中でも桑原石ヶ元古墳群からは鉄器を作るときに使う道具が古墳の中から発見されました。この古墳を作っていた６世紀後半頃には古墳の近くで鉄器を作っていて、この古墳に葬られた人は鉄器を作っていた人たちのリーダーだったと考えられます。鉄器を作る道具は桑原古墳群Ａ群２号墳でも見つかっています。

桑原石ヶ元古墳群と同じ頃、丘陵の南側でも古墳が作られました。この中で元岡古墳群Ｇ－６号墳に葬られた人に１本の刀がそなえられました。この刀には 19 個の文字が金で刻まれていました。刻まれた文章には刀を作った日が正確に記録されていました。これは日本で暦（カレンダー）を使った一番古い例と考えられています。

（古墳の調査について詳しくは 12 ページ）

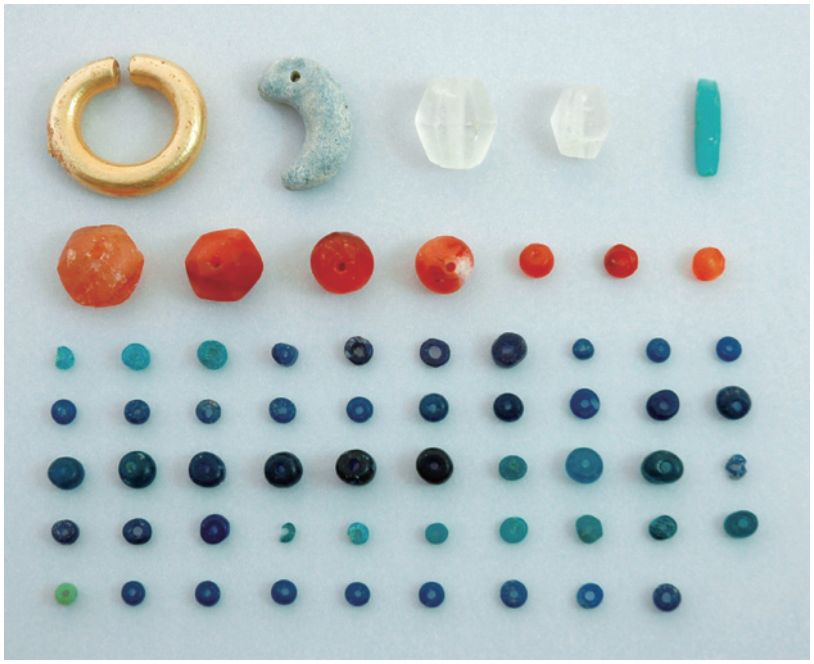
鉄を作るときの道具
（桑原古墳群Ａ群２号墳出土・25 次調査）

# ～元岡・桑原の古墳から出てきた鏡・玉～



金屎古墳出土鏡（左：菱雲文鏡（りょううんもんきょう），右：芝草文鏡（しそうもんきょう））

元岡 E-1 墳出土鏡（方格（ほうかく）T 字鏡）



古墳から出土した玉・装身具（元岡古墳群 G-3 号墳出土）

# 奈良時代・平安時代

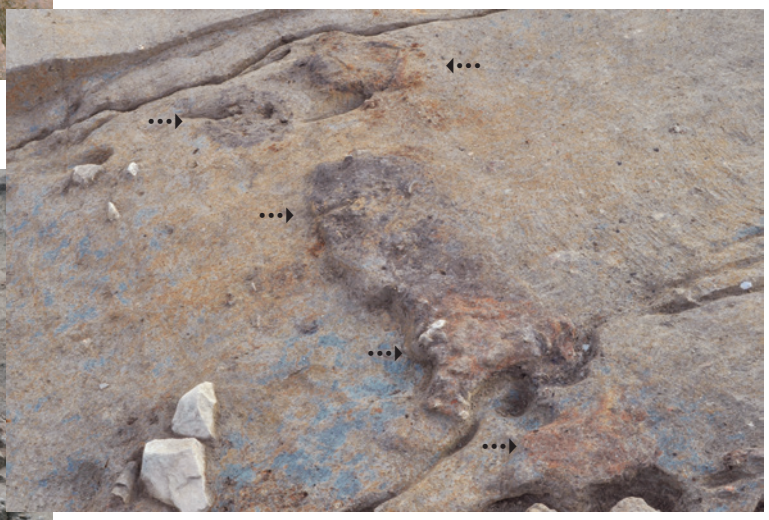
奈良時代には元岡・桑原地区は嶋郡に属しました。奈良・東大寺正倉院に残された戸籍には、嶋郡の川辺郷に当時住んでいた「肥君猪手」という人物の名前が書かれています。他に元岡・桑原遺跡群からは当時の人の名前が具体的に書かれている木簡（木の札）が発見されています。元岡・桑原遺跡群は奈良時代から平安時代にかけての日本の歴史を考える上でたいへん重要な遺跡です。

この時代に関する調査では、7 次、12 次、18 次、20 次、24 次の調査で、砂鉄を高温で溶かして鉄を作る製鉄炉など、製鉄に関連する遺構が数多く発見されました。これらの調査では砂鉄から鉄分を取り出すときにできた不純物のかたまり（鉄滓）が大量に見つかり、合わせて 80 トン以上の鉄滓が捨てられたことがわかりました。このことから、当時ここで何十トンもの鉄が作られたことが考えられます。奈良時代には国の護りのために大宰府や怡土城に多くの兵士（防人）が駐屯していて、これらの鉄から刀や弓矢などの武器や、よろい・馬具などが作られました。

また、31 次調査では瓦を作った窯跡が見つかりました。ここで作られた瓦は、当時の外国の使者をもてなす施設だった「鴻臚館」の建物に使用されました。

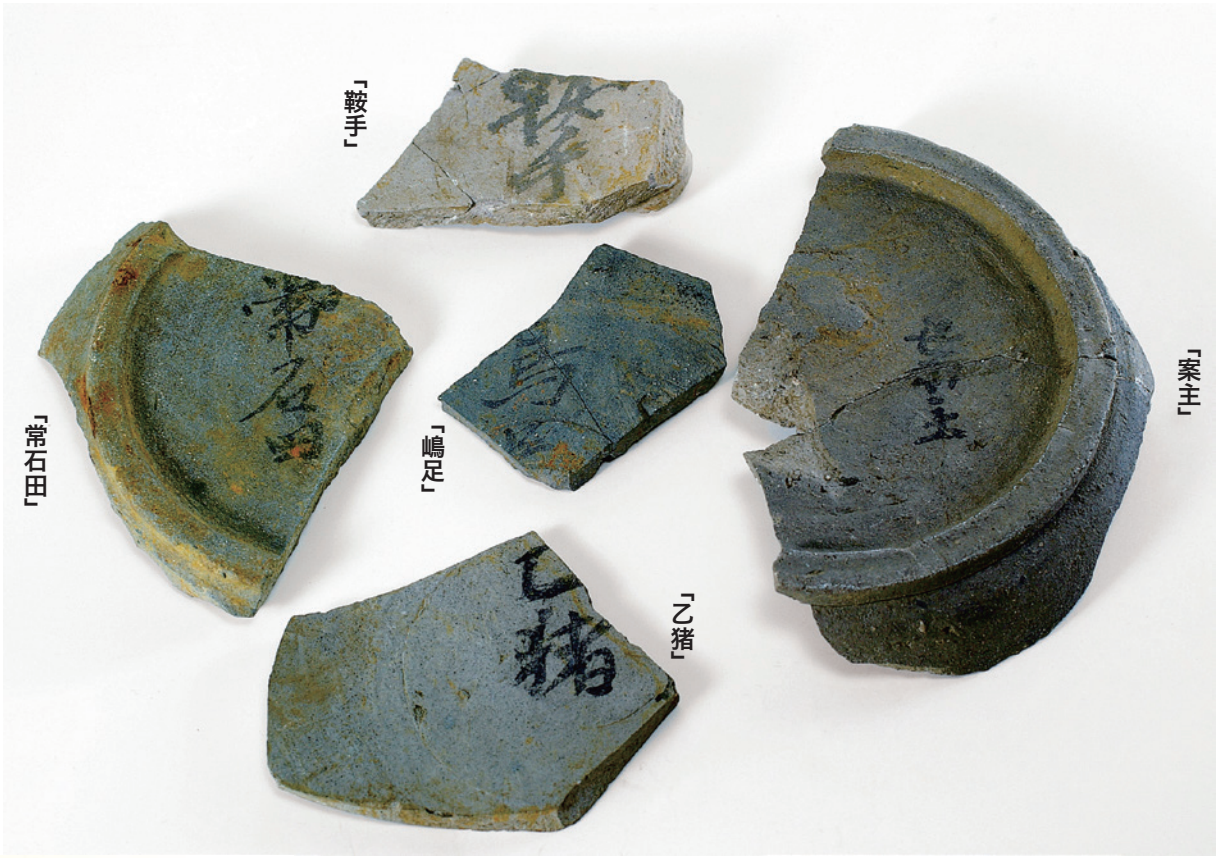
製鉄炉（24 次調査 1 号製鉄炉）

## ～古代の製鉄炉・鍛冶炉～



鍛冶炉（57 次調査 15 号～ 19 号鍛冶炉）
※矢印の先が鍛冶炉

製鉄炉から流れ出した鉄滓（57 次調査）




～発掘調査で出てきた「文字」～

「酒」のはんこ

～元岡で作られた鴻臚館の瓦～

瓦を焼いた窯（左）と、平瓦（上）・丸瓦（下）（31 次調査出土）

# 鎌倉時代以降

当時、志摩郡には皇室の広大な荘園（怡土庄）があり、他に観世音寺、安楽寺などの寺社の荘園もおかれていました。18 次調査では当時の建物の跡が見つかり、寺社の荘園の一部と考えられています。このほかに 46 次調査でも 11 ～ 15 世紀の村の跡が見つかっています。56 次調査では 13 世紀ごろの建物が発見され、すぐ横の古墳を開けて中に入り、中で火をたいていたことが分かっています。

13 世紀の蒙古襲来（元寇）の後、この地に入った有力武将の大友氏は近くの柑子岳に城を築きます。その後戦国時代にかけて、この地を巡って大友、大内の争いが繰り広げられます。元岡・桑原の丘陵には柑子岳城の出城として水崎城が築かれ、丘陵の各地に砦や堀が作られます。58 次調査では堀切とみられる大溝を発見し、38 次調査では水崎城の堀が見つかりました。

江戸時代には元岡・桑原地区は農村になり、これまで入海だった丘陵の東側と南側は干拓によって水田になりました。36 次、63 次調査では江戸時代の人々の墓を発掘しました。

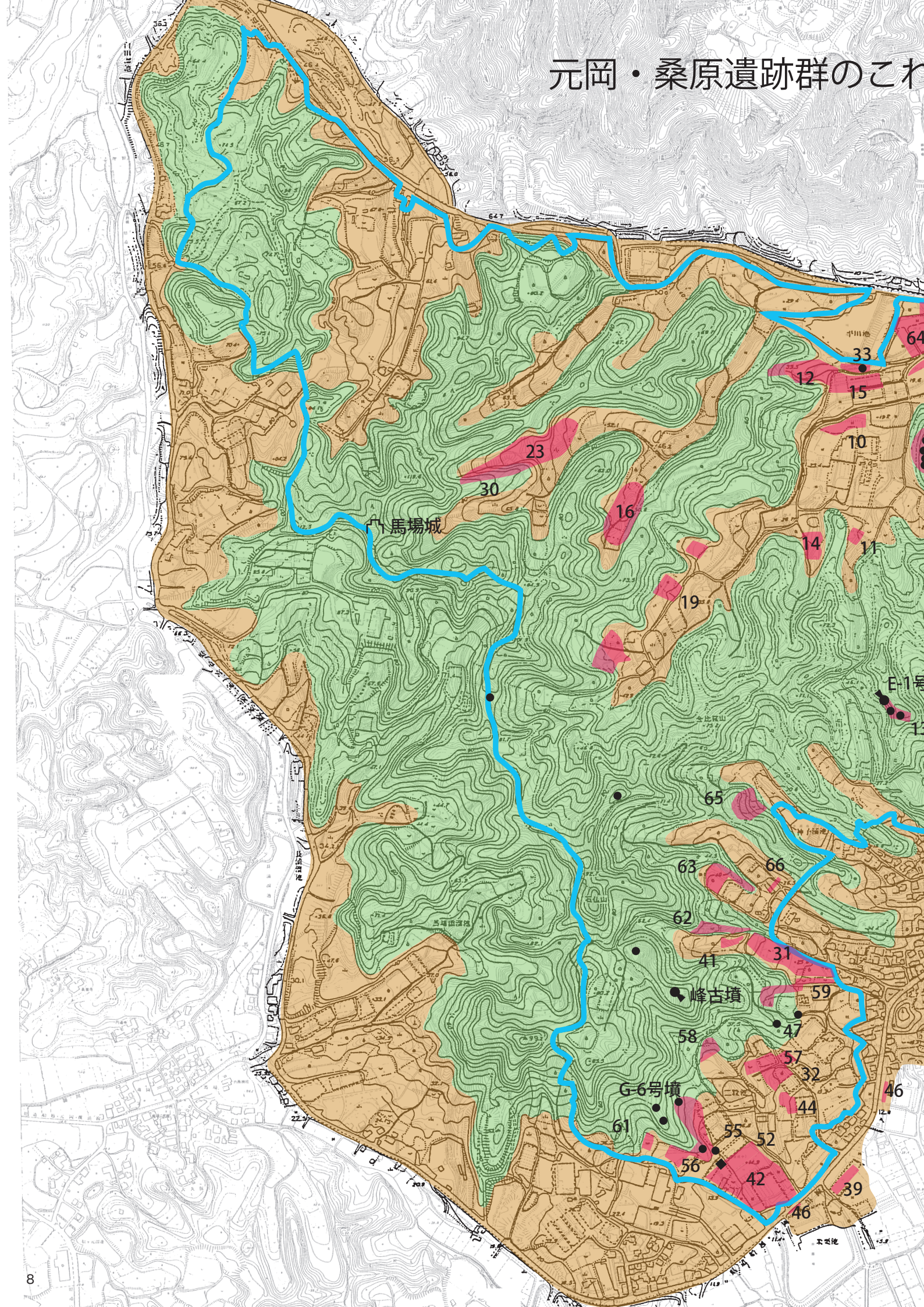
明治 22 年には元岡・桑原を含む 5 カ村が合併して糸島郡元岡村が成立します。この元岡村が福岡市に編入されたのは昭和 36（1961）年のことです。

← 56 次調査で見つかった建物跡（右手奥は元岡 G-6 号墳）

鎌倉時代頃の墓と、副葬されていた青磁碗（57 次調査）→

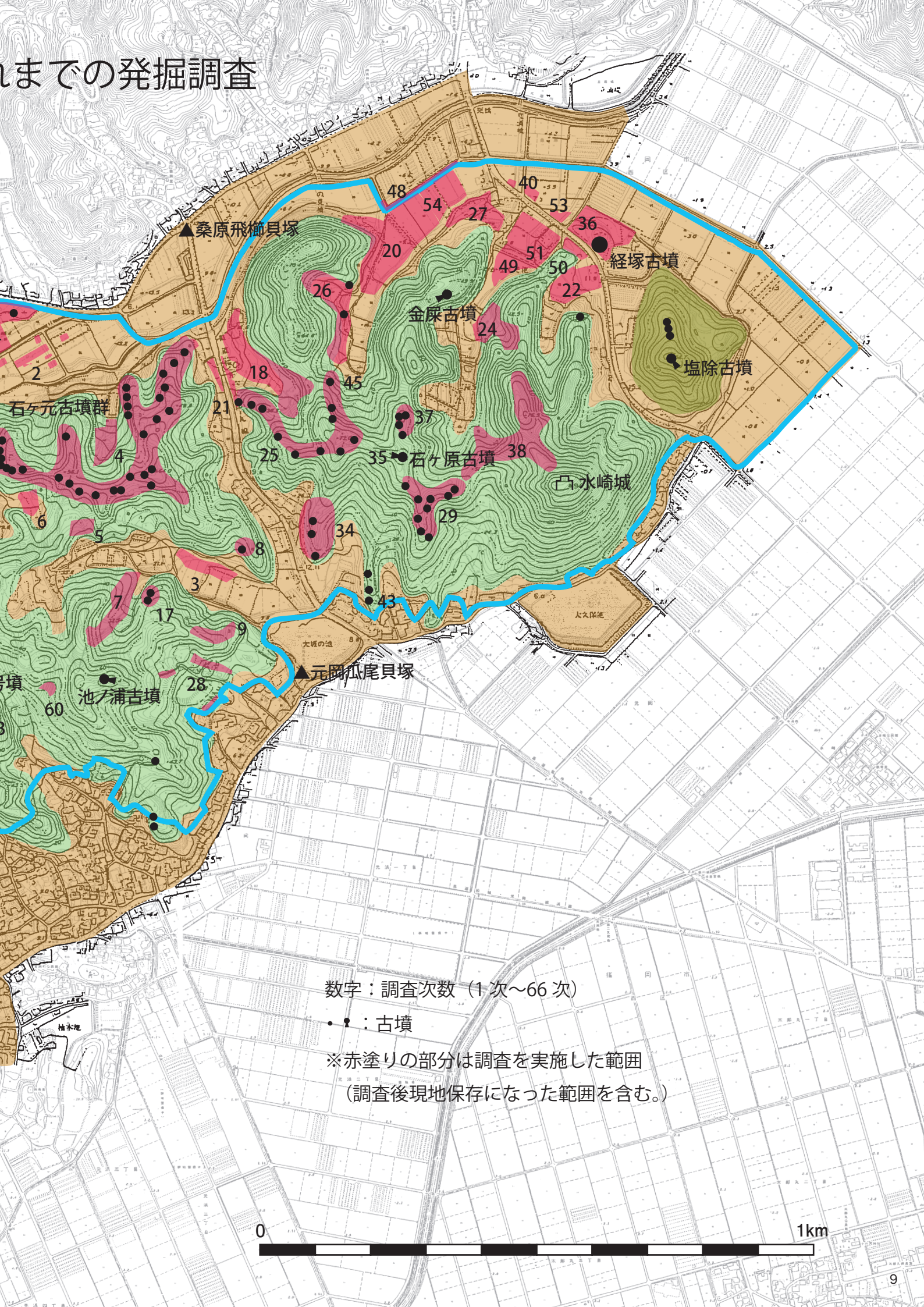
←室町時代後期の染付碗（左）と白磁（57 次調査出土）

# 元岡・桑原遺跡群のこれ



馬場城
峰古墳
G-6号墳
E-1号
33
12
15
10
23
30
16
14
11
19
65
63
66
62
41
31
59
47
58
57
32
46
44
61
55
52
56
42
39
46

# れまでの発掘調査


▲桑原飛櫛貝塚
経塚古墳
金屎古墳
塩除古墳
石ヶ元古墳群
石ヶ原古墳
水崎城
▲元岡瓜尾貝塚
池ノ浦古墳
48
54
27
40
53
36
20
51
49
50
22
26
24
2
18
45
21
37
25
35
38
4
29
6
5
34
8
3
43
7
17
9
28
60
数字：調査次数（1 次～66 次）
：古墳
※赤塗りの部分は調査を実施した範囲
（調査後現地保存になった範囲を含む。）
0
1km

# 発掘調査から元岡・桑原の歴史を探る

## テーマ1～元岡・桑原のはじまり―縄文時代の初め～

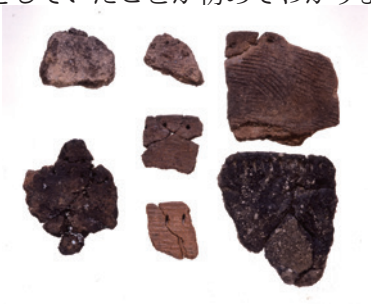
縄文時代の石組炉。1ヶ所から集中して発見された。

### 第3次調査　―縄文時代早期の石造りの炉―

3次調査で見つかった縄文時代の遺構は縄文早期の撚糸文土器・刺突文土器から押型文土器の時期です。出土した遺構は石を積み上げた集石遺構や回りに石を並べた炉などです。炉から出土した炭化物を分析したところ、今から9000年前の遺構であることが分かりました。

炉や集石遺構は、当時の人々が煮炊きをしたりするなど、生活をしていた直接の証拠になり、縄文時代の初め頃に人々がここで生活をしていたことが初めてわかりました。

石組炉の形にはいくつかの種類がある。



出土した縄文土器。縄文時代の初め頃のもの。（撚糸文土器）

### 第58次調査　―市内最大規模の縄文早期の遺跡―

58次調査区は、丘陵南側の谷の奥にあります。標高30～33mの斜面に堆積した地層から、縄文時代早期（約1万年前）の遺物が4000点以上見つかりました。土器には押型文土器から刺突文土器、撚糸文土器、条痕文土器など色々な文様の土器があり、地層ごとにそれぞれの文様の土器の含まれ方が違っていることから、時代ごとに文様が変化したことが分かりました。

土器と一緒に、集石遺構や石組炉などの遺構も見つかっています。縄文時代早期の遺跡としては、福岡市内でも規模が大きなもので、貴重な資料です。

58次調査区。谷の奥にある。

かたまって出土した黒曜石の石材。貯蔵されていたものでしょうか。

石組炉（左）と、出土した縄文土器（刺突文土器）

## テーマ２～弥生時代の大量の土器―42・52 次調査―

42 次・52 次調査では谷の合流地点を発掘しました。その結果２本の川の中で総延長 100 m以上にわたって土器の破片が厚く堆積しているのを発見しました。

土器はいくつかの小グループに分かれて見つかりました。川の底からは縄文時代の終わり頃の遺物が出土していますが、大部分は弥生時代の中期（約 2000 年前）から古墳時代の初め（約 1700 年前）に作られた土器です。土器に混じって銅鏡（どうきょう）や銅鐸（どうたく）、中国の貨幣（かへい）も見つかっています。

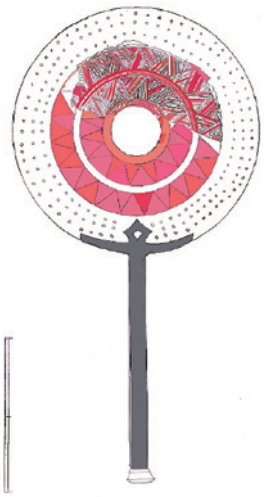
川の底からは、木器も見つかっています。農具や家の柱材の他に、琴や翳（さしば）とよばれるものも見つかりました。

これだけの土器がなぜここに堆積したのか、まだ分かっていません。ただ、この遺跡からお祭りに関係するような、絵が書かれた土器や楽器が見つかっているので、ここでお祭りを行って土器を投げ込んだことも考えられます。

川に沿って一面に土器の破片が広がる。何個の土器があるのか、想像もつかない。

42 次調査で出土した小型の銅鐸（２個）

表面に文様がある木の円板。高貴な人に差し掛ける団扇（うちわ）のようなものと考えられる。→



当時の中国から伝わった貨幣

鳥形の木製品。お祭りで使ったものだろう。

# テーマ３～元岡・桑原の前方後円墳・古墳

## 桑原金屎古墳　―元岡・桑原で最初の前方後円墳―

北に延びる尾根の上、標高 53m の地点に桑原金屎古墳と呼ばれる前方後円墳があります。全長約 24m、後円部の直径は 12.5m、前方部の幅は約 12m の大きさです。

古墳の後円部の頂上には亡くなった人をおさめた木棺を埋めた穴が見つかりました。穴は長方形で縦 5m、横 4m の大きさで、その中に 2.6m の長さの木の棺が埋められていました。

木棺の中には鏡が２枚置かれていました。鏡は４世紀頃に中国で作られたものと考えられます。また木棺の底から赤い色素が見つかり、当時は木棺が赤く塗られていたと考えられています。

古墳が作られた時代は、古墳の形や出土遺物から古墳時代の前期後半（４世紀後半）頃と考えられます。

金屎古墳（左）と木棺（右･2 枚の鏡が見える）

## 元岡石ヶ原古墳　―高い墳丘で威容を誇っていた古墳―

元岡石ヶ原古墳は平成８年（1996 年）と平成 15 ～ 17 年（2003 ～ 2005 年）に発掘調査が行われました。

調査の結果、全長 49m、後円部の直径 25m、前方部の幅 23m の大きさであることが分かりました。なくなった人をおさめた石室は後円部の中央に作られた横穴式石室でしたが、大部分の石が抜き取られていました。残っていた石材から石室は長さ 3.6m、幅 2.1m の大きさだったことが分かりました。前方部と後円部の境目付近で大型の器台などが見つかり、この部分でお祭りを行ったと考えられます。出土遺物の時代から、６世紀に築かれた古墳と考えられます。

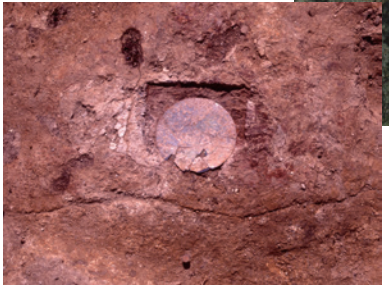
石ヶ原古墳の石室は調査後に移築され、現在は九州大学イースト１号館前のロータリーで見ることができます。

元岡石ヶ原古墳（上）と子持台付𤭯（下）

## 元岡古墳群Ｅ群１号墳　―今津湾を見わたす好立地の前方後円墳と奇跡的に残った鏡―

E-1 号墳は平成 11 年（1999 年）の調査で、全長 35m の前方後円墳ということが確認できました。なくなった人をおさめた木棺は後円部に埋められたと考えられますが、その後江戸時代に新しく作られた墓や戦後の果樹園のために壊されてしまいました。しかしほんの少し残っていた木棺の一部から一緒に埋められていた銅鏡が発見されました。

古墳の埋葬の形や出土した鏡から、古墳時代前期（４世紀）に作られた古墳ではないかと考えられます。



元岡Ｅ－１号墳（上）と出土した鏡（左）

## 桑原石ヶ元古墳群　―鉄器づくりの人々の古墳―

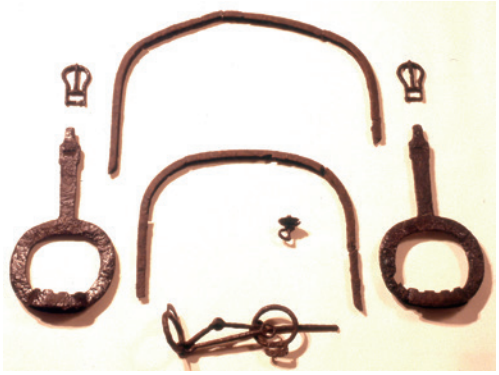
石ヶ元古墳群には尾根に沿って全部で 32 基の古墳があります。古墳が作られたのは 5 世紀後半から 6 世紀までの約 100 年間で、その後も奈良時代まで人々はこの古墳になくなった人を葬ったり、土器を供えたりしていました。

それぞれの墓からは亡くなった人に縁のある品物が見つかり、葬られた人がどのような人物だったのかを考える手がかりを与えてくれます。８号墳からは鳳凰の飾りがついた大刀が発見され、高い地位の人の墓だったと考えられます。また 12 号墳からは鉄器を作るときに使う道具がセットで見つかり、鉄器づくりの人々のリーダーの墓だったと考えられます。その他、馬に乗るときの道具がおさめられた古墳もあり、当時馬に乗る人々が暮らしていたことも分かりました。

上空から見た桑原石ヶ元古墳群

８号墳石室（右）と単鳳環頭大刀（右下）。大刀は出土した時は２つに折れていました（下）。

８号墳で見つかった馬具→



12 号墳の石室の中（↑）と、12 号墳から見つかった鉄器を作る道具（→）

## 元岡古墳群Ｇ群　―元岡・桑原遺跡群のイメージを変えた２本の大刀―

元岡古墳群Ｇ群は元岡・桑原遺跡群の南端に位置する古墳群で、６基の古墳で構成されています。

Ｇ－１号墳は方墳で、大きさ・形は一辺 18m の正方形です。石室に使われている石材はたいへん大きく、築いた人の権力の大きさが想像できます。石室は西側に出入口が付く横穴式石室で、石室奥の亡くなった人をおさめる部屋（玄室）からは刀が５本を含む多くの品物が発見されました。特に、金銅製の刀飾り（圭頭柄頭）は特殊な形をしていて、当時の大和朝廷からもらったものと考えられます。

Ｇ－６号墳は直径 18m の古墳で、１号墳と同様に石室の石材が大きいものです。石室の出入口は南側につく横穴式石室で、玄室からは金で文字が書かれた刀が見つかりました。書かれている文字から「庚寅銘大刀」と名前がついたこの刀は、日本で最初に正確な暦（カレンダー）を使用して文章を書いたもので、大変重要な文化財です。

発掘された元岡古墳群Ｇ群

１号墳石室（↑）と圭頭柄飾（→）

６号墳。墳丘は調査以前に失われていました。

庚寅銘大刀の出土直後(左)と錆落とし後(右)。Ｘ線で銘文があることを確認し、錆を落として銘文を修復しました。

# テーマ4～元岡・桑原の製鉄・鉄器生産

## 7次調査　―「壬辰年韓鉄」木簡の発見―

7次調査では旧石器時代から奈良時代までの遺跡が発掘されましたが、その中でも奈良時代の村の跡と、製鉄炉・鍛冶炉などの施設が見つかったことで、元岡・桑原の古代の鉄生産について貴重な成果を上げることができました。

村は谷の奥の斜面を平らに造成して作られていました。村には建物、柵などが作られていることもわかりました。

谷の奥や斜面には鉄を作る製鉄炉や、鉄を熱して鉄器を作るための鍛冶炉が作られていて、この村で製鉄や鉄器づくりをおこなっていたことが分かりました。また村の中央の谷には水を貯めるための池が作られていて、池の中から「壬辰年韓鉄」と書かれた木簡（木の札）が発見されました。「壬辰年」は西暦692年と考えられ、この時には既にここで鉄（鉄器）を作り始めていたことが考えられます。

「壬辰年韓鐵□□」と書かれた木簡

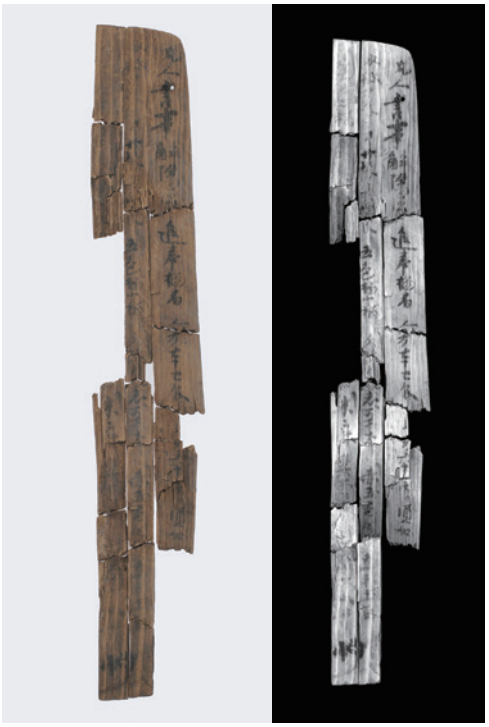
奈良時代の建物跡と柵列

## 12次・15次調査　―鉄作りのための「おまじない」木簡―

12次調査では桑原地区の西の奥にある谷で発掘調査を行い、奈良時代の製鉄炉が27基確認できました。製鉄炉は幅60mの範囲に広がり、大きく6つのグループに分かれて作られています。ここで鉄を作るときにできた、不純物のかたまり（鉄滓）がここだけで78トンも見つかり、分析の結果、大原海岸の砂鉄を原料に鉄を作っていたことが分かりました。

12次調査の東側を発掘した15次調査では川をせき止めて水を貯めた堰が見つかりました。堰の底からはお祓いのために用意する品物を書いた木簡が発見され、鉄を作り始めたときに大掛かりなお祓いをしたことがわかりました。大規模な製鉄炉群とお祓いの木簡は、ここで国家的なプロジェクトとして鉄が作られたことを意味しています。

12次調査地点。谷の左岸に製鉄炉がずらりと並んでいる。



お祓いのための用具が書かれた木簡。人形や馬形、水舟や弓矢、酒、米などの品名と数量が書かれている。

## 18 次調査　―山奥につくられた製鉄・鉄器作りの村―

18 次調査は桑原地区から丘陵を入った谷の奥を発掘し、旧石器時代から鎌倉・室町時代までの各時代の遺跡を調査しました。

ここでは 7 世紀に建物のほかに製鉄炉、鍛冶炉がつくられ、特に鍛冶炉は 7 世紀の中頃に 44 基も発見されていて、ここで鉄器を盛んに作っていたことが考えられます。製鉄炉は炉の両側に不純物を捨てる穴が掘られた形のもので、7 世紀の終わり頃から奈良時代にかけてここで製鉄が行われたとみられます。

元岡・桑原遺跡群の調査ではこの地点の製鉄炉が最も古く、元岡・桑原の大規模製鉄・鉄器生産はここから始まったのかもしれません。

18 次調査地点

18 次調査で見つかった「居木」。鞍の部品で、国内最古級のもの。

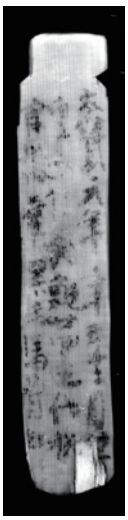
## 20 次調査　―池の中からたくさんの木簡が―

20 次調査の発掘では、谷の入り口付近を中心に多くの建物が建てられていたことが分かりました。当時は貴重だった、朝鮮半島産の緑釉陶器が見つかり、重さを測るときのおもり（「権」）も発見されました。

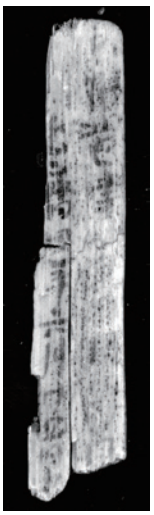
また、谷の入り口を堰き止めて作られた大型のため池からは、「大寶(宝)元年」（701 年）と書かれた木簡が見つかり、他に「嶋郡赤敷里」「登志郷」など当時の糸島の地名や「難波部」「額田部」などの人名が書かれた木簡や墨書土器が多数発見されました。

緑釉陶器や権、木簡、墨書土器は当時ここに多くの人やものが集まっていたことを物語っています。もしかしたら、当時ここに役所のようなものがあったのかもしれません。

20 次調査地点。谷の右側にため池が見える。



冒頭に「大寶元年」と書かれた木簡



二行目に「延暦四年六月廿四日中」と書かれた木簡。延暦四年は西暦７８５年で奈良時代の終わり頃。

# 元岡・桑原遺跡群のこれから～発掘調査と保存・活用～

元岡・桑原遺跡群の発掘調査で得られた成果は図面や写真などの記録として保存され、36 冊の発掘調査報告書が刊行されて調査・研究に役立てられています。

また、調査中に発見された遺構のうち、重要なものについては埋め戻して現地で保存されています。やむをえず現地保存できなかった一部の重要な遺構については剥ぎ取りや移築復元を行い、発掘当時の状態で展示できるようにしています。

出土品に対する科学分析も行われ、発掘調査の結果と合わせて新しい成果を出しています。発掘調査は終了しましたが、これから分析や研究を進めれば、いつの日か大発見があるかも知れません。

元岡古墳群Ｇ－１号墳の刀の取り上げ作業。

庚寅銘大刀のサビ落としの作業。細心の注意を払って作業を進めます。

---


元岡・桑原遺跡群

―九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う発掘調査―

平成 31 年（2019 年）3 月 25 日　発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目８－１

印刷　末松印刷株式会社

福岡市博多区東那珂２丁目４－３６


---


発掘調査にあたっては九州大学をはじめとする関係者の方々に多くのご協力をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。

12 次・15 次調査地点●
●峰古墳（前方後円墳）
●31 次調査地点
●58 次調査地点
●57 次調査地点
●元岡古墳群 G-6 号墳
●42 次・52 次調査地点

（平成 20 年撮影）